

第 2 章

半単純 Lie 代数

この章以降、 \mathbb{K} -ベクトル空間 V の零ベクトルを $0 \in V$ と書き、零ベクトル空間 $\{0\}$ のことも 0 と表記する^{*1}。この章において、特に断らない限り体 \mathbb{K} は代数閉体^{*2}で、かつ $\text{char } \mathbb{K} = 0$ であるとする。また、Lie 代数 \mathfrak{g} は常に有限次元であるとする。

2.1 Lie の定理・Cartan の判定条件

2.1.1 Lie の定理

定理 2.1.1:

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし、 $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数 $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$ が可解であるとする。
このとき $V \neq 0$ ならば、 $\forall x \in \mathfrak{g}$ は共通の固有ベクトルを持つ。

系 2.1.2: Lie の定理

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし、 $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数 $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$ が可解であるとする。
このとき $\forall x \in \mathfrak{g}$ は V のある共通の旗を安定化する。 i.e. $\forall x \in \mathfrak{g}$ の表現行列を同時に上三角行列にするような V の基底が存在する。

2.1.2 Jordan-Chevalley 分解

この小節において体 \mathbb{K} は代数閉体で、かつ標数は任意とする。

^{*1} 記号の濫用だが、広く普及している慣習である。

^{*2} つまり、定数でない任意の 1 変数多項式 $f(x) \in \mathbb{K}[x]$ に対してある $\alpha \in \mathbb{K}$ が存在して $f(\alpha) = 0$ を満たす。

定義 2.1.1: 線型変換の半単純性

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし, $x \in \text{End } V$ とする. x が半単純 (semisimple) であるとは, x の最小多項式が \mathbb{K} 上で重根を持たないことを言う^a.

^a x が対角化可能であることと同値である.

命題 2.1.1: Jordan-Chevalley 分解

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし, $x \in \text{End } V$ を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1) 半単純な $x_s \in \text{End } V$ と冪零な $x_n \in \text{End } V$ が一意的存在して,

$$x = x_s + x_n$$

と書ける.

- (2) 定数項を持たない $p(t), q(t) \in \mathbb{K}[t]$ であって, $x_s = p(x)$, $x_n = q(x)$ を満たすものが存在する. 特に $[x, x_s] = [x, x_n] = [x_s, x_n] = 0$ が成り立つ.
- (3) 部分ベクトル空間 $A \subset B \subset V$ があって $x|_B: B \rightarrow A$ であるとき, $x_s|_B, x_n|_B$ の値域もまた A に収まる.

補題 2.1.1:

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし, $x \in \text{End } V$ とその Jordan-Chevalley 分解 $x = x_s + x_n$ を与える.

このとき $\text{ad}(x) \in \text{End}(\mathfrak{gl}(V))$ の Jordan-Chevalley 分解 $\text{ad}(x) = \text{ad}(x)_s + \text{ad}(x)_n$ は $\text{ad}(x)_s = \text{ad}(x_s)$, $\text{ad}(x)_n = \text{ad}(x_n)$ を満たす.

補題 2.1.2:

\mathfrak{U} を有限次元 \mathbb{K} -代数とする. このとき微分代数 $\text{Der } \mathfrak{U} \subset \text{End } \mathfrak{U}$ の任意の元 $x \in \text{Der } \mathfrak{U}$ の Jordan-Chevalley 分解 $x = x_s + x_n$ に対して $x_s, x_n \in \text{Der } \mathfrak{U}$ が成り立つ.

2.1.3 Cartan の判定条件

定理 2.1.3: Cartan の判定条件

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし, $\mathfrak{gl}(V)$ の部分 Lie 代数 $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$ を与える.

このとき以下の 2 つは同値である:

- (1) \mathfrak{g} が可解
- (2) $\forall x \in [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}], \forall y \in \mathfrak{g}$ に対して $\text{Tr}(x \circ y) = 0$ が成り立つ

系 2.1.4:

Lie 代数 \mathfrak{g} を与える.

このとき $\forall x \in [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}], \forall y \in \mathfrak{g}$ に対して $\text{Tr}(\text{ad}(x) \circ \text{ad}(y)) = 0$ が成り立つならば, \mathfrak{g} は可解である.

2.2 Killing 形式

2.2.1 半単純性の判定条件

定義 2.2.1: Killing 形式

体 \mathbb{K} 上の Lie 代数 \mathfrak{g} の上の対称な双線型形式

$$\kappa: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}, (x, y) \longmapsto \text{Tr}(\text{ad}(x) \circ \text{ad}(y))$$

のことを \mathfrak{g} の **Killing 形式** (Killing form) と呼ぶ.

定義 2.2.2: 双線型形式の radical

体 \mathbb{K} 上の Lie 代数 \mathfrak{g} の上の対称な双線型形式

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}$$

を与える.

- \mathfrak{g} の 部分ベクトル空間

$$S_\beta := \{ x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 \}$$

のことを β の **radical** と呼ぶ.

- β が **非退化** (nondegenerate) であるとは, $S_\beta = 0$ であることを言う.

定理 2.2.1: Lie 代数の半単純性と Killing 形式の非退化性

\mathfrak{g} が半単純 Lie 代数 $\iff \mathfrak{g}$ の **Killing 形式が非退化**

2.2.2 単純イデアル

Lie 代数 \mathfrak{g} と, そのイデアルの族 $\{\mathfrak{i}_i\}_{i \in I}$ を与える. \mathfrak{g} が $\{\mathfrak{i}_i\}_{i \in I}$ の **直和** (direct sum)^{*3} であるとは, 部分ベクトル空間の内部直和として

$$\mathfrak{g} = \bigoplus_{i \in I} \mathfrak{i}_i$$

^{*3} 厳密には, 命題??の意味で**内部直和** (internal direct sum) と呼ぶべきだと思う.

が成り立つことを言う。

定理 2.2.2: 半単純 Lie 代数の直和分解

\mathfrak{g} を半単純 Lie 代数とする。このとき \mathfrak{g} の単純イデアル $\mathfrak{i}_1, \dots, \mathfrak{i}_t$ が存在して以下を満たす：

(1)

$$\mathfrak{g} = \bigoplus_{i=1}^t \mathfrak{i}_i$$

(2) \mathfrak{g} の任意の単純イデアルは \mathfrak{i}_i のどれか 1 つと一致する。 i.e. (1) の直和分解は一意である。

(3) \mathfrak{i}_i 上の Killing 形式 $\kappa_{\mathfrak{i}_i}$ は $\kappa_{\mathfrak{i}_i \times \mathfrak{i}_i}$ に等しい。

系 2.2.3:

\mathfrak{g} が半単純 Lie 代数ならば以下が成り立つ：

(1) $\mathfrak{g} = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$

(2) \mathfrak{g} の任意のイデアルは半単純である。

(3) 任意の Lie 代数の準同型 $f: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{h}$ について, $\text{Im}(\mathfrak{h})$ は半単純である。

(4) \mathfrak{g} の任意のイデアルは \mathfrak{g} の単純イデアルの直和である。

2.2.3 内部微分

定理 2.2.4:

半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} に対して,

$$\text{ad}(\mathfrak{g}) = \text{Der } \mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$$

2.2.4 抽象 Jordan 分解

\mathfrak{g} を半単純 Lie 代数とする。このとき \mathfrak{g} の中心 $Z(\mathfrak{g})$ は \mathfrak{g} の可解イデアルなので 0 となる。 i.e. $\text{ad}: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ に関して $\text{Ker ad} = Z(\mathfrak{g}) = 0$ が言えるので ad は単射である。一方で定理 2.2.4 より $\text{ad}(\mathfrak{g}) = \text{Der } \mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ なので、補題 2.1.2 を合わせると $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して $\text{ad}(x) \in \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の Jordan-Chevalley 分解 $\text{ad}(x) = \text{ad}(x)_s + \text{ad}(x)_n$ w/ $\text{ad}(x)_s, \text{ad}(x)_n \in \text{ad}(\mathfrak{g})$ が存在する。

定義 2.2.3: 抽象 Jordan 分解

$\forall x \in \mathfrak{g}$ の抽象 Jordan 分解とは、 $\text{ad}(s_x) = \text{ad}(x)_s$, $\text{ad}(n_x) = \text{ad}(x)_n$ を満たす $s_x, n_x \in \mathfrak{g}$ のこと。

ad が単射なので、 $\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ における通常の Jordan-Chevalley 分解の一意性から s_x, n_x は一意に決まる。さらに $\text{ad}(x) = \text{ad}(s_x) + \text{ad}(n_x) = \text{ad}(s_x + n_x)$ ということなので $x = s_x + n_x \in \mathfrak{g}$ が成り立つ。さらに命題

2.1.1-(2) より $0 = [\text{ad}(s_x), \text{ad}(n_x)] = \text{ad}([s_x, n_x])$ なので $[s_x, n_x] = 0$ もわかる.

2.3 表現の完全可約性

2.3.1 \mathfrak{g} -加群と表現

この小節では \mathbb{K} を任意の体とする. まず, 環上の加群の定義を復習する:

公理 2.3.1: 環上の加群の公理

- R を環とする. **左 R 加群** (left R -module) とは, 可換群 $(M, +, 0)$ と写像^a

$$\cdot : R \times M \rightarrow M, (a, x) \mapsto a \cdot x$$

の組 $(M, +, \cdot)$ であって, $\forall x, x_1, x_2 \in M, \forall a, b \in R$ に対して以下を充たすもののことを言う:

(LM1) $a \cdot (b \cdot x) = (ab) \cdot x$

(LM2) $(a + b) \cdot x = a \cdot x + b \cdot x$

(LM3) $a \cdot (x_1 + x_2) = a \cdot x_1 + a \cdot x_2$

(LM4) $1 \cdot x = x$

ただし, $1 \in R$ は環 R の乗法単位元である.

- R を環とする. **右 R 加群** (right R -module) とは, 可換群 $(M, +, 0)$ と写像

$$\cdot : M \times R \rightarrow M, (x, a) \mapsto x \cdot a$$

の組 $(M, +, \cdot)$ であって, $\forall x, x_1, x_2 \in M, \forall a, b \in R$ に対して以下を充たすもののことを言う:

(RM1) $(x \cdot b) \cdot a = x \cdot (ba)$

(RM2) $x \cdot (a + b) = x \cdot a + x \cdot b$

(RM3) $(x_1 + x_2) \cdot a = x_1 \cdot a + x_2 \cdot a$

(RM4) $x \cdot 1 = x$

- R, S を環とする. **(R, S) 両側加群** $((R, S)\text{-bimodule})$ とは, 可換群 $(M, +, 0)$ と写像

$$\cdot_L : R \times M \rightarrow M, (a, x) \mapsto a \cdot_L x$$

$$\cdot_R : M \times R \rightarrow M, (x, a) \mapsto x \cdot_R a$$

の組 $(M, +, \cdot_L, \cdot_R)$ であって, $\forall x \in M, \forall a \in R, \forall b \in S$ に対して以下を充たすもののことを言う:

(BM1) 左スカラー乗法 \cdot_L に関して M は左 R 加群になる

(BM2) 右スカラー乗法 \cdot_R に関して M は右 S 加群になる

(BM3) $(a \cdot_L x) \cdot_R b = a \cdot_L (x \cdot_R b)$

^a この写像 \cdot はスカラー乗法 (scalar multiplication) と呼ばれる.

R が可換環の場合, (LM1) と (RM1) が同値になるので, 左 R 加群と右 R 加群の概念は同値になる. これを単に **R 加群** (R -module) と呼ぶ.

R が体の場合, R 加群のことを **R -ベクトル空間** と呼ぶ.

! 以下では, なんの断りもなければ R 加群と言って左 R 加群を意味する.

\mathfrak{g} を体 \mathbb{K} 上の Lie 代数とする. このとき, **環上の加群の公理** を少し修正することで Lie 代数 \mathfrak{g} 上の加群の概念を得る:

公理 2.3.2: Lie 代数上の加群

\mathfrak{g} を体 \mathbb{K} 上の Lie 代数とする. **\mathfrak{g} -加群** とは, \mathbb{K} -ベクトル空間 $(V, +, \cdot)$ と写像

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times V \longrightarrow V, (x, v) \longmapsto x \blacktriangleright v$$

の 4 つ組 $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$ であって, $\forall x, x_1, x_2 \in \mathfrak{g}, \forall v, v_1, v_2 \in V, \forall \lambda, \mu \in \mathbb{K}$ に対して以下を充たすもののことを言う:

$$(M1) \quad (\lambda \cdot x_1 + \mu \cdot x_2) \blacktriangleright v = \lambda \cdot (x_1 \blacktriangleright v) + \mu \cdot (x_2 \blacktriangleright v)$$

$$(M2) \quad x \blacktriangleright (\lambda \cdot v_1 + \mu \cdot v_2) = \lambda \cdot (x \blacktriangleright v_1) + \mu \cdot (x \blacktriangleright v_2)$$

$$(M3) \quad [x, y] \blacktriangleright v = x \blacktriangleright (y \blacktriangleright v) - y \blacktriangleright (x \blacktriangleright v)$$

同値な定義として, Lie 代数の表現

$$\phi: \mathfrak{g} \longrightarrow \mathfrak{gl}(V), x \longmapsto (v \mapsto \phi(x)(v))$$

について

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times V \longrightarrow V, (x, v) \longmapsto \phi(x)(v)$$

とおくことで得られる 4 つ組 $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$ のことである^a.

^a 【例??】より $\mathfrak{gl}(V)$ の Lie ブラケットは交換子だったので $[x, y] \blacktriangleright - = \phi([x, y]) = [\phi(x), \phi(y)] = \phi(x) \circ \phi(y) - \phi(y) \circ \phi(x) = x \blacktriangleright (y \blacktriangleright -) - y \blacktriangleright (x \blacktriangleright -)$ となる.

! \mathfrak{g} -加群に備わっている 3 つの演算 (加法, スカラー乗法, 左作用) をいちいち全て明記するのは面倒なので $(V, +, \cdot, \blacktriangleright)$ のことを「 **\mathfrak{g} -加群 V** 」と略記する. この略記において, 今まで通りスカラー乗法 \cdot は省略して λv の様に見え, 左作用はなんの断りもなく $x \blacktriangleright v$ の様に見え書くことにする.

全く同様に代数上の加群, 結合代数上の加群を定義することもできるが, 本章では以降 **\mathfrak{g} -加群** と言ったら **Lie 代数上の加群** を指すことにする. Lie 代数の表現を考えることは \mathfrak{g} -加群を考えることと同値なのである.

定義 2.3.1: \mathfrak{g} -加群の準同型

\mathfrak{g} を Lie 代数, $(V, +, \cdot, \triangleright_1), (W, +, \cdot, \triangleright_2)$ を \mathfrak{g} -加群とする.

- 線型写像 $f: V \rightarrow W$ が \mathfrak{g} -加群の準同型 (homomorphism of \mathfrak{g} -module) ^a であるとは, $\forall x \in \mathfrak{g}, \forall v \in V$ に対して

$$f(x \triangleright_1 v) = x \triangleright_2 f(v)$$

が成り立つこと ^b.

- \mathfrak{g} -加群の準同型 $f: V \rightarrow W$ が同型 (isomorphism) であるとは, f が ベクトル空間の同型写像 であることを言う.
- 同型な \mathfrak{g} -加群のことを, 同値な \mathfrak{g} の表現 (equivalent representation of \mathfrak{g}) とも言う.

^a 同変写像 (equivalent map) と言うこともある. 絡作用素 (intertwining operator), インタートウィナー (intertwiner) と言う場合もあるが, そこまで普及していない気がする.

^b スカラー乗法についての線型性の定義を \triangleright について拡張しただけ.

同値な定義だが, 線型写像 $f: V \rightarrow W$ が \mathfrak{g} -加群の準同型であるとは, Lie 代数の表現

$$\phi_1: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright_1 v)$$

$$\phi_2: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(W), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright_2 v)$$

に関して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f \circ \phi_1(x) = \phi_2(x) \circ f$$

が成り立つことを言う.

定義 2.3.2: 部分 \mathfrak{g} -加群

\mathfrak{g} -加群 V を与える. 部分集合 $W \subset V$ が 部分 \mathfrak{g} -加群 であるとは, W が和, スカラー乗法, \mathfrak{g} の左作用の全てについて閉じていること. i.e. $\forall w, w_1, w_2 \in W, \forall \lambda \in \mathbb{K}, \forall x \in \mathfrak{g}$ に対して

$$w_1 + w_2 \in W$$

$$\lambda w \in W$$

$$x \triangleright w \in W$$

が成り立つことを言う.

同値な定義として, 以下の2つの条件が満たされることを言う:

(sub-M1) W が V の部分ベクトル空間

(sub-M2) Lie 代数の表現

$$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V), x \mapsto (v \mapsto x \triangleright v)$$

に関して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, \phi(x)(W) \subset W$$

が成り立つ. i.e. $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して W は $\phi(x)$ -不変である.

【例 2.3.1】 \mathfrak{g} -加群の準同型の核と像

\mathfrak{g} -加群 V, W とその間の \mathfrak{g} -加群の準同型 $f: V \longrightarrow W$ を与える. このとき

$$\begin{aligned} v \in \text{Ker } f &\implies \forall x \in \mathfrak{g}, f(x \blacktriangleright v) = x \blacktriangleright f(v) = x \blacktriangleright 0 = 0 \iff \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright v \in \text{Ker } f, \\ w \in \text{Im } f &\iff \exists v \in V, w = f(v) \implies \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright w = x \blacktriangleright f(v) = f(x \blacktriangleright v) \\ &\iff \forall x \in \mathfrak{g}, x \blacktriangleright w \in \text{Im } f \end{aligned}$$

が言えるので $\text{Ker } f, \text{Im } f$ はそれぞれ V, W の部分 \mathfrak{g} -加群である.

2.3.2 \mathfrak{g} -加群の直和と既約性

この小節でも \mathbb{K} を任意の体とする.

定義 2.3.3: \mathfrak{g} -加群の直和

\mathfrak{g} -加群の族 $\{(V_i, +, \cdot, \blacktriangleright_i)\}_{i \in I}$ を与える. このとき

- 直和ベクトル空間 $\bigoplus_{i \in I} V_i$
- $\bigoplus_{i \in I} V_i$ への \mathfrak{g} の左作用

$$\blacktriangleright: \mathfrak{g} \times \bigoplus_{i \in I} V_i \longrightarrow \bigoplus_{i \in I} V_i, (x, (v_i)_{i \in I}) \longmapsto (x \blacktriangleright_i v_i)_{i \in I}$$

の組として得られる \mathfrak{g} -加群 $(\bigoplus_{i \in I} V_i, +, \cdot, \blacktriangleright)$ を \mathfrak{g} -加群の直和 (direct sum) と呼び^a, $\bigoplus_{i \in I} V_i$ と略記する.

^a 系??の注と同様に, この定義は厳密には外部直和 (external direct sum) と呼ぶべきだと思う.

定義 2.3.4: Lie 代数の表現の既約性

- \mathfrak{g} -加群 V が既約 (irreducible)^a であるとは, V の部分 \mathfrak{g} -加群が $0, V$ のちょうど2つ^bだけであることを言う.
- \mathfrak{g} -加群 V が完全可約 (completely reducible) であるとは, V が既約な部分 \mathfrak{g} -加群の直和^cであることを言う.

^a i.e. Lie 代数 \mathfrak{g} の表現 (ϕ, V) が既約表現 (irreducible representation; irrep) だ, と言っても良い.

^b つまり, 零ベクトル空間 0 は既約な \mathfrak{g} -加群とは呼ばない.

^c こちらの場合, 厳密には内部直和 (internal direct sum) と呼ぶべきだと思う.

次の補題は証明が少し厄介である：

補題 2.3.1: 完全可約の全射

g-加群の準同型 $p: V \longrightarrow W$ を与える．このとき p が全射かつ V が**完全可約**ならば，**g-加群の短完全列**

$$0 \longrightarrow \text{Ker } p \hookrightarrow V \xrightarrow{p} W \longrightarrow 0$$

は分裂する．

証明 V が完全可約という仮定から，**既約な部分 g-加群**の族 $\{V_i\}_{i \in I}$ が存在して，内部直和の意味で

$$V = \bigoplus_{i \in I} V_i$$

と書ける．ここで S を以下の条件を充たす組 (J, V_J) 全体の集合とする：

- $J \subset I, V_J = \bigoplus_{j \in J} V_j \subset V$
- $\text{Ker } p \cap V_J = 0$

S の上の 2 項関係を

$$(J, V_J) \leq (K, V_K) \stackrel{\text{def}}{\iff} J \subset K$$

と定義すると組 (S, \leq) は順序集合になる．また $S' = \{(J_a, V_{J_a})\}_{a \in A}$ を S の任意の全順序部分集合とすると $(\bigcup_{a \in A} J_a, V_{\bigcup_{a \in A} J_a}) \in S$ であり^{*4}，これが S' の上界を与える．i.e. S は帰納的順序集合である．したがって Zorn の補題を使うことができ， S は極大元 $(J_0, V_{J_0}) \in S$ を持つ．

次に $V = \text{Ker } p \oplus V_{J_0}$ を示す． S の定義から $\text{Ker } p \cap V_{J_0} = 0$ なので，命題??より $V = \text{Ker } p + V_{J_0}$ を示せば良い． $V \neq \text{Ker } p + V_{J_0}$ を仮定すると，ある $k \in I \setminus J_0$ が存在して $V_k \not\subset \text{Ker } p + V_{J_0}$ を充たす． V_k は既約なので $V_k \cap (\text{Ker } p + V_{J_0}) = 0$ が成り立つが，このことは (J_0, V_{J_0}) の極大性に矛盾．よって背理法から $V = \text{Ker } p + V_{J_0}$ が言えた．

以上より $W \cong V / \text{Ker } p \cong V_{J_0}$ が言える．このとき包含準同型 $i: V_{J_0} \hookrightarrow V$ が $p \circ i = \text{id}_{V_{J_0}}$ を充たすので証明が完了した． ■

命題 2.3.1: 完全可約性の特徴付け

以下の 2 つは同値である：

- (1) **g-加群** V が**完全可約**
- (2) V の任意の**部分 g-加群** $W \subset V$ に対して，**部分 g-加群** $W^c \subset V$ ^aが存在して $V \cong W \oplus W^c$ を充たす．

^a W の**補表現** (complement representation) と言う．

^{*4} $V_{\bigcup_{a \in A} J_a} = \bigoplus_{j \in \bigcup_{a \in A} J_a} V_j = \bigcup_{a \in A} V_{J_a}$ なので， \cap の分配律から $\text{Ker } p \cap V_{\bigcup_{a \in A} J_a} = \text{Ker } p \cap \bigcup_{a \in A} V_{J_a} = \bigcup_{a \in A} (\text{Ker } p \cap V_{J_a}) = 0$ が言える．

証明 (1) \implies (2) V が既約な部分 \mathfrak{g} -加群の族 $\{V_i\}_{i \in I}$ によって

$$V = \bigoplus_{i \in I} V_i$$

と書けるとする. V の任意の部分 \mathfrak{g} -加群 $W \subset V$ を 1 つ固定する. このとき標準的射影 $p: V \rightarrow V/W$ は全射な \mathfrak{g} -加群の準同型なので, 補題 2.3.1 から \mathfrak{g} -加群の短完全列

$$0 \longrightarrow \text{Ker } p \cong W \hookrightarrow V \xrightarrow{p} V/W \longrightarrow 0$$

が分裂する. よって系??から

$$V \cong W \oplus (V/W)$$

が言えた.

(1) \Leftarrow (2)

V の既約な部分 \mathfrak{g} -加群全体の集合を \mathcal{V} と書く. \mathcal{S} を以下の条件を充たす組 (I, V_I) 全体の集合とする:

- $I \subset \mathcal{V}$
- 内部直和の意味で $V_I = \bigoplus_{i \in I} V_i \subset V$

\mathcal{S} 上の 2 項関係を

$$(I, V_I) \leq (J, V_J) \stackrel{\text{def}}{\iff} I \subset J$$

と定義すると組 (\mathcal{S}, \leq) は順序集合になる. V の 0 でない部分 \mathfrak{g} -加群のうち極小のものを V_1 とすると, 定義から $V_1 \in \mathcal{V}$ なので $(\{V_1\}, V_{V_1}) \in \mathcal{S}$ となり \mathcal{S} は空でない. また $\mathcal{S}' = \{(J_a, V_{J_a})\}_{a \in A}$ を \mathcal{S} の任意の全順序部分集合とすると $(\bigcup_{a \in A} J_a, V_{\bigcup_{a \in A} J_a}) \in \mathcal{S}$ であり, これが \mathcal{S}' の上界を与える. i.e. \mathcal{S} は帰納的順序集合である. したがって Zorn の補題を使うことができ, \mathcal{S} は極大元 $(I_0, V_{I_0}) \in \mathcal{S}$ を持つ. このとき $V = V_{I_0}$ であることを背理法により示そう.

$V \neq V_{I_0}$ を仮定する. このとき (2) より V の 0 でない部分 \mathfrak{g} -加群 $V_{I_0}^c$ が存在して $V \cong V_{I_0} \oplus V_{I_0}^c$ を充たす. このとき $V_{I_0}^c$ に含まれる 0 でない極小の部分 \mathfrak{g} -加群 W をとることができるが, 定義からこの W は既約である. よって

$$W \oplus V_{I_0} \subset V$$

もまた既約部分 \mathfrak{g} -加群の直和となり, V_{I_0} の極大性に矛盾する. ■

補題 2.3.2: Schur の補題

任意の体^a \mathbb{K} 上の \mathfrak{g} -加群 V, W , および 0 でない \mathfrak{g} -加群の準同型 $f: V \rightarrow W$ を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1) V が既約ならば f は単射
- (2) W が既約ならば f は全射

^a 代数閉体でなくても良い

証明 (1) 【例 2.3.1】より $\text{Ker } f$ は V の部分 \mathfrak{g} -加群だが, V が既約なので $\text{Ker } f = 0$, V のどちらかである. 仮定より f は 0 でないので $\text{Ker } f = 0$, i.e. f は単射である.

(2) 【例 2.3.1】より $\text{Im } f$ は W の部分 \mathfrak{g} -加群だが, W が既約なので $\text{Im } f = 0$, W のどちらかである. 仮定より f は 0 でないので $\text{Im } f = W$, i.e. f は全射である. ■

系 2.3.1: 代数閉体上の Schur の補題

代数閉体 \mathbb{K} 上の有限次元 \mathfrak{g} -加群 V を与える. このとき V が既約ならば, 任意の \mathfrak{g} -加群の自己準同型 $\phi \in \text{End } V$ はある $\lambda \in \mathbb{K}$ を使って $\phi = \lambda \text{id}_V$ (i.e. スカラー倍) と書ける.

証明 仮定より V が既約なので, 補題 2.3.2-(1), (2) より任意の \mathfrak{g} -加群の自己準同型 $\phi: V \rightarrow V$ は \mathfrak{g} -加群の同型か 0 のどちらかである. ここで $\lambda \in \mathbb{K}$ を ϕ の固有値とする. \mathbb{K} が代数閉体なので λ は確かに存在する. このとき写像 $\phi - \lambda \text{id}_V: V \rightarrow V$ もまた \mathfrak{g} -加群の自己準同型となるが, 固有値の定義から $\det(\phi - \lambda \text{id}_V) = 0$ なので同型写像ではあり得ない. よって $\phi - \lambda \text{id}_V = 0 \iff \phi = \lambda \text{id}_V$ である. ■

系 2.3.2: 可換な Lie 代数の有限次元既約表現

代数閉体上の Lie 代数 \mathfrak{g} が可換ならば, \mathfrak{g} の任意の有限次元既約表現は 1 次元である.

証明 $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ を \mathfrak{g} の有限次元既約表現とする. このとき \mathfrak{g} が可換であることから $\forall x, y \in \mathfrak{g}, \forall v \in V$ に対して

$$\begin{aligned} \phi(x)(y \triangleright v) &= \phi(x) \circ \phi(y)(v) \\ &= [\phi(x), \phi(y)](v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi([x, y])(v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi(0)(v) + \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= \phi(y) \circ \phi(x)(v) \\ &= y \triangleright (\phi(x)(v)) \end{aligned}$$

が言える. i.e. $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して $\phi(x): V \rightarrow V$ は \mathfrak{g} -加群の準同型である. よって Schur の補題から $\phi(x)$ がスカラー倍だとわかる. 故に V の任意の 1 次元部分ベクトル空間は自動的に部分 \mathfrak{g} -加群になる. 然るに V は仮定より既約だから V の部分 \mathfrak{g} -加群は 0, V しかあり得ない. さらに $V \neq 0$ なので $\dim V = 1$ でなくてはならない. ■

2.3.3 \mathfrak{g} -加群の Hom とテンソル積

この小節でも \mathbb{K} を任意の体とする.

定義 2.3.5: \mathfrak{g} -加群のテンソル積

$(V_1, +, \cdot, \triangleright_1), (V_2, +, \cdot, \triangleright_2)$ を有限次元 \mathfrak{g} -加群 とする. このとき

- \mathbb{K} -ベクトル空間のテンソル積 $V_1 \otimes V_2$
- $V_1 \otimes V_2$ への \mathfrak{g} の左作用^a

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times (V_1 \otimes V_2) \longrightarrow V_1 \otimes V_2, (x, v_1 \otimes v_2) \longmapsto (x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 v_2)$$

の組として得られる \mathfrak{g} -加群 $(V_1 \otimes V_2, +, \cdot, \triangleright)$ を \mathfrak{g} -加群のテンソル積 (tensor product) と呼び, $V_1 \otimes V_2$ と略記する.

^a 正確には, これの右辺を線型に拡張したもの

実際 $V_1 \otimes V_2$ が \mathfrak{g} -加群になっていることを確認しておこう:

$$\begin{aligned} [x, y] \triangleright (v_1 \otimes v_2) &= ([x, y] \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes ([x, y] \triangleright_2 v_2) \\ &= (x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 - (y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 \\ &\quad + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2) - v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2) \\ &= ((x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - ((y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2)), \\ x \triangleright y \triangleright (v_1 \otimes v_2) - y \triangleright x \triangleright (v_1 \otimes v_2) &= x \triangleright ((y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - y \triangleright ((x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 v_2)) \\ &= ((x \triangleright_1 y \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (x \triangleright_2 y \triangleright_2 v_2)) \\ &\quad - ((y \triangleright_1 x \triangleright_1 v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes (y \triangleright_2 x \triangleright_2 v_2)) \end{aligned}$$

なので

$$[x, y] \triangleright (v_1 \otimes v_2) = x \triangleright y \triangleright (v_1 \otimes v_2) - y \triangleright x \triangleright (v_1 \otimes v_2)$$

がわかった.

定義 2.3.6: \mathfrak{g} -加群の双対

$(V, +, \cdot, \triangleright)$ を有限次元 \mathfrak{g} -加群 とする. このとき

- 双対ベクトル空間 $V^* = \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, \mathbb{K})$
- V^* への \mathfrak{g} の左作用

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times V^* \longrightarrow V^*, (x, f) \longmapsto (v \mapsto -f(x \triangleright v))$$

の組として得られる \mathfrak{g} -加群 $(V^*, +, \cdot, \triangleright)$ を \mathfrak{g} -加群の双対 (dual)^a と呼び, V^* と略記する.

^a 反傾 (contragradient) と呼ぶ場合もあるようだが, 現在はあまり使われていないような気がする.

実際 V^* が \mathfrak{g} -加群になっていることを確認しておこう：

$$\begin{aligned}
([x, y] \triangleright f)(v) &= -f([x, y] \triangleright f)(v) \\
&= -f(x \triangleright y \triangleright v - y \triangleright x \triangleright v) \\
&= -f(x \triangleright y \triangleright v) + f(y \triangleright x \triangleright v) \\
&= (x \triangleright f)(y \triangleright v) - (y \triangleright f)(x \triangleright v) \\
&= -(y \triangleright (x \triangleright f))(v) + (x \triangleright (y \triangleright f))(v) \\
&= (x \triangleright y \triangleright f)(v) - (y \triangleright x \triangleright f)(v)
\end{aligned}$$

なので

$$[x, y] \triangleright f = x \triangleright y \triangleright f - y \triangleright x \triangleright f$$

がわかった。

ここで、 \mathbb{K} -ベクトル空間の自然な同型（命題??）

$$V^* \otimes W \cong \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$$

の具体形が

$$\alpha: f \otimes w \mapsto (v \mapsto f(v) \cdot w) \quad (2.3.1)$$

となっていたことを思い出そう。このことから、 \mathbb{K} -ベクトル空間 $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$ の上の \mathfrak{g} の左作用を

$$x \triangleright (f \otimes w) = -f(x \triangleright -) \otimes w + f \otimes (x \triangleright w)$$

に着想を得て

$$(x \triangleright F)(v) = -F(x \triangleright v) + x \triangleright F(v) \quad (\forall F \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W))$$

と定義しようと思うのが自然である。というのも、こう定義することで \mathbb{K} -ベクトル空間の同型写像 (2.3.1) が

$$\begin{aligned}
\alpha(x \triangleright (f \otimes w))(v) &= -\alpha(f(x \triangleright -) \otimes w)(v) + \alpha(f \otimes (x \triangleright w))(v) \\
&= -f(x \triangleright v) \cdot w + f(v) \cdot (x \triangleright w) \\
&= -f(x \triangleright v) \cdot w + x \triangleright (f(v) \cdot w) \\
&= (x \triangleright \alpha(f \otimes w))(v)
\end{aligned}$$

となって **\mathfrak{g} -加群の同型写像**になる！

定義 2.3.7: \mathfrak{g} -加群の Hom

$(V, +, \cdot, \triangleright_1), (W, +, \cdot, \triangleright_2)$ を有限次元 **\mathfrak{g} -加群**とする。このとき

- \mathbb{K} -ベクトル空間 $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$ ^a
- $\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$ への \mathfrak{g} の左作用

$$\triangleright: \mathfrak{g} \times \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W), F \longmapsto (v \mapsto -F(x \triangleright_1 v) + x \triangleright_2 F(v))$$

の組として得られる \mathfrak{g} -加群 $(\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W), +, \cdot, \triangleright)$ を **$\text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$** と略記する。

^a V から W への **\mathfrak{g} -加群の準同型**全体の集合ではない。

2.3.4 Casimir 演算子

この小節では \mathbb{K} は標数 0 の体とする.

定義 2.3.8: 忠実な表現

Lie 代数 \mathfrak{g} の表現 $\rho: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ が**忠実** (faithful)^a であるとは, ρ が単射であることを言う.

^a 群作用の文脈では**効果的な作用** (effective action) と呼ぶ.

補題 2.3.3:

- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の**忠実な有限次元表現** $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- \mathfrak{g} 上の対称な双線型形式

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \rightarrow \mathbb{K}, (x, y) \mapsto \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

を与える. β の **radical** を

$$S_\beta := \{ x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 \}$$

とおく. このとき以下が成り立つ:

- (1) S_β は \mathfrak{g} のイデアルである.
- (2) $S_\beta = 0$, i.e. β は**非退化**である.

証明 (1) Tr の循環性から

$$\begin{aligned} \beta(x, [y, z]) &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi([y, z])) \\ &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y) \circ \phi(z)) - \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(z) \circ \phi(y)) \\ &= \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y) \circ \phi(z)) - \text{Tr}(\phi(y) \circ \phi(x) \circ \phi(z)) \\ &= \text{Tr}(\phi([x, y]) \circ \phi(z)) \\ &= \beta([x, y], z) \end{aligned}$$

が成り立つので, $\forall x \in \mathfrak{g}, \forall y \in S_\beta$ に対して

$$\forall z \in \mathfrak{g}, \beta([x, y], z) = -\beta(y, [x, z]) = 0$$

が成り立つ. i.e. $[x, y] \in S_\beta$ が言えた.

(2) S_β の定義から $[\phi(x), \phi(y)]$ の形をした $[\phi(S_\beta), \phi(S_\beta)]$ の任意の元および $\forall \phi(z) \in \phi(S_\beta)$ に対して

$$\begin{aligned} \text{Tr}([\phi(x), \phi(y)] \circ \phi(z)) &= \text{Tr}(\phi([x, y]) \circ \phi(z)) \\ &= \beta([x, y], z) \\ &= 0 \end{aligned}$$

が成り立つので, 定理 2.1.3 より $\phi(S_\beta)$ は可解である. ϕ は忠実なので $\text{Ker } \phi = 0$ であり, 準同型定理から $\phi(S_\beta) \cong S_\beta / \text{Ker } \phi = S_\beta$ が言える. 従って (1) も併せると S_β は \mathfrak{g} の可解イデアルである. 仮定より \mathfrak{g} は半単純だったから, 半単純 Lie 代数の定義から $S_\beta = 0$ が言える.

補題 2.3.4:

- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式 $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$ であって $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$ に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を満たすもの

を与える. このとき以下が成り立つ:

- (1) \mathfrak{g} の基底 $\{e^\mu\}$ であって^a, $\forall(\mu, \nu) \in \{1, \dots, \dim \mathfrak{g}\}^2$ に対して

$$\beta(e_\mu, e^\nu) = \delta_\mu^\nu$$

を満たすものが一意に存在する.

- (2) $\forall x \in \mathfrak{g}$ を一つ固定する. このとき $\text{ad}(x): \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の基底 $\{e_\mu\}$ による表現行列 $[a_\mu^\nu]_{1 \leq \mu, \nu \leq \dim \mathfrak{g}}$ と, (1) の基底 $\{e^\mu\}$ による表現行列 $[b^\mu_\nu]_{1 \leq \mu, \nu \leq \dim \mathfrak{g}}$ について

$$a_\mu^\nu = -b^\nu_\mu$$

が成り立つ.

^a \mathfrak{g}^* の元ではないが, Einstein の規約との便宜上添字を上付きにする.

証明 (1) $\beta_{\mu\nu} := \beta(e_\mu, e_\nu)$ とおく. このとき $x = x^\mu e_\mu \in \mathfrak{g}$ に対して

$$\begin{aligned} \forall y = y^\nu e_\nu \in \mathfrak{g}, \beta(x, y) = 0 &\iff \forall \begin{bmatrix} y^1 \\ \vdots \\ y^{\dim \mathfrak{g}} \end{bmatrix} \in \mathbb{K}^{\dim \mathfrak{g}}, \beta_{\mu\nu} x^\mu y^\nu = 0 \\ &\iff 1 \leq \forall \nu \leq \dim \mathfrak{g}, \beta_{\nu\mu} x^\mu = 0 \\ &\iff \begin{bmatrix} x^1 \\ \vdots \\ x^{\dim \mathfrak{g}} \end{bmatrix} \in \text{Ker}[\beta_{\mu\nu}] \subset \mathbb{K}^{\dim \mathfrak{g}} \end{aligned}$$

が言える. ただし 2 つ目の同値変形で β が対称であることを使った. したがって β が非退化であることは $\text{Ker}[\beta_{\mu\nu}] = 0$ と同値であり, このことはさらに補題??-(3) より $\det[\beta_{\mu\nu}] \neq 0$ と同値である^{*5}. よって $[\beta_{\mu\nu}]$ の逆行列 $[\alpha^{\mu\nu}]$ が一意に存在するので, $e^\mu := e_\nu \alpha^{\mu\nu}$ と定めると,

$$\beta(e_\mu, e^\nu) = \alpha^{\nu\rho} \beta_{\mu\rho} = \delta_\mu^\nu$$

が成り立つ.

^{*5} Cramer の公式は任意の体 \mathbb{K} 上で成り立つ.

(2) $\text{ad}(x)(e_\mu) =: a_\mu^\nu e_\nu$, $\text{ad}(e^\mu) =: b^\mu_\nu e^\nu$ とおくと,

$$\begin{aligned} a_\mu^\nu &= a_\mu^\rho \delta_\rho^\nu \\ &= a_\mu^\rho \beta(e_\rho, e^\nu) \\ &= \beta(\text{ad}(x)(e_\mu), e^\nu) \\ &= \beta(-[e_\mu, x], e^\nu) \\ &= \beta(e_\mu, -\text{ad}(x)e^\nu) \\ &= -b^\nu_\rho \beta(e_\mu, e^\rho) \\ &= -b^\nu_\mu \end{aligned}$$

■

定義 2.3.9: 忠実な表現の Casimir 演算子

- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の有限次元表現 $\phi: \mathfrak{g} \longrightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式 $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$ であって $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$ に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を充たすもの

を与える. 与えられた \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$ から補題 2.3.4 により構成した \mathfrak{g} の基底 $\{e^\mu\}$ をとる. このとき

- \mathbb{K} -線型変換

$$c_\phi(\beta): V \longrightarrow V, v \longmapsto \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\mu)(v)$$

を β, ϕ の前 Casimir 演算子と呼ぶ.

- ϕ が忠実な表現で, かつ

$$\beta(x, y) := \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

であるとき^a, β, ϕ の前 Casimir 演算子のことを ϕ の Casimir 演算子 (Casimir operator of ϕ) と呼んで c_ϕ と略記する.

^a 補題 2.3.3 よりこの β は非退化である

命題 2.3.2: Casimir 演算子の性質

- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の有限次元表現 $\phi: \mathfrak{g} \longrightarrow \mathfrak{gl}(V)$
- 半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$
- 対称かつ非退化な双線型形式 $\beta \in L(\mathfrak{g}, \mathfrak{g}; \mathbb{K})$ であって $\forall x, y, z \in \mathfrak{g}$ に対して

$$\beta(x, [y, z]) = \beta([x, y], z)$$

を充たすもの

を与える. 与えられた \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$ から補題 2.3.4 により構成した \mathfrak{g} の基底 $\{e^\mu\}$ をとる.

- (1) 前 Casimir 演算子 $c_\phi(\beta) \in \text{End}(V)$ は, $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して

$$[\phi(x), c_\phi(\beta)] = 0$$

を充たす. 従って $c_\phi(\beta)$ は \mathfrak{g} -加群の準同型である.

- (2) ϕ が忠実な表現ならば, Casimir 演算子 $c_\phi \in \text{End } V$ について

$$\text{Tr } c_\phi = \dim \mathfrak{g}$$

が成り立つ.

- (3) \mathbb{K} が代数閉体でかつ ϕ が忠実な表現でかつ ϕ が既約表現ならば, Casimir 演算子 $c_\phi \in \text{End } V$ は \mathfrak{g} の基底の取り方によらずに

$$c_\phi = \frac{\dim \mathfrak{g}}{\dim V} \text{id}_V$$

と書ける.

証明 (1) $\forall x, y, z \in \text{End}(V)$ に対して

$$[x, y \circ z] = [x, y] \circ z + y \circ [x, z]$$

が成り立つことと補題 2.3.4-(2) より,

$$\begin{aligned} [\phi(x), c_\phi(\beta)] &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} [\phi(x), \phi(e_\mu)] \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ [\phi(x), \phi(e^\mu)] \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \text{ad}(\phi(x))(\phi(e_\mu)) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \text{ad}(\phi(x))(\phi(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(\text{ad}(x)(e_\mu)) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(\text{ad}(x)(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} a_\mu^\nu \phi(e_\nu) \circ \phi(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} b^\mu_\nu \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\nu) \\ &= 0 \end{aligned}$$

が言えた.

- (2) 補題 2.3.4-(1) より

$$\begin{aligned} \text{Tr } c_\phi &= \sum_{\mu}^{\dim \mathfrak{g}} \text{Tr}(\phi(e_\mu) \circ \phi(e^\mu)) \\ &= \sum_{\mu}^{\dim \mathfrak{g}} \beta(e_\mu, e^\mu) \\ &= \dim \mathfrak{g} \end{aligned}$$

(3) \mathbb{K} が代数閉体でかつ ϕ が既約なので, (1), (2) と代数閉体上の Schur の補題から $c_\phi: V \rightarrow V$ は $(\dim \mathfrak{g} / \dim V) \text{id}_V$ に等しい. ■

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ が忠実でない場合は次のように考える: まず, \mathfrak{g} が半単純なので, $\text{Ker } \phi$ (\mathfrak{g} のイデアルである) は系??から \mathfrak{g} の単純イデアルの直和である. 定理 2.2.2 を使って \mathfrak{g}^\perp を $\mathfrak{g} =: \text{Ker } \phi \oplus \mathfrak{g}^\perp$ で定義すると, $\mathfrak{g}^\perp \cong \mathfrak{g} / \text{Ker } \phi$ なので, 制限

$$\phi|_{\mathfrak{g}^\perp}: \mathfrak{g}^\perp \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$$

は忠実な表現になる. そして \mathfrak{g}^\perp の基底に対して定義 2.3.9 を適用するのである.

2.3.5 Weyl の定理

この小節では \mathbb{K} を標数 0 の体とする. [?, 第 7 章, p.80-86] に倣って Weyl の定理を証明する.

補題 2.3.5:

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ を半単純 Lie 代数の有限次元表現とする. このとき

$$\phi(\mathfrak{g}) \subset \mathfrak{sl}(V)$$

が成り立つ. 特に, $\dim V = 1$ ならば ϕ は零写像である^a

^a これを自明な表現 (trivial representation) と言う.

証明 【例??】 より, $\mathfrak{sl}(V)$ の基底は行列単位 e_{ij} を使って

$$\{e_{ij} - e_{ji} \mid 1 \leq i \neq j \leq \dim V\} \cup \{e_{ii} - e_{i+1,i+1} \mid 1 \leq i \leq \dim V - 1\} = \{\{e_i\}, \{e_j\}\}$$

と書けた. よって $\mathfrak{sl}(V) = [\mathfrak{gl}(V), \mathfrak{gl}(V)]$ である. 一方で \mathfrak{g} が半単純なので系 2.2.3-(1) より $\mathfrak{g} = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$ であるから,

$$\phi(\mathfrak{g}) = \phi([\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]) = [\phi(\mathfrak{g}), \phi(\mathfrak{g})] \subset [\mathfrak{gl}(V), \mathfrak{gl}(V)] = \mathfrak{sl}(V)$$

が言えた. 特に $\dim V = 0$ ならば $\dim \mathfrak{sl}(V) = 1^2 - 1 = 0$ なので, $\text{Im } \phi = 0$ である. ■

補題 2.3.6: Whitehead の補題

半単純 Lie 代数の有限次元表現 $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ を与える.
このとき

$$\forall x, y \in \mathfrak{g}, f([x, y]) = \phi(x) \circ f(y) - \phi(y) \circ f(x) \quad (2.3.2)$$

を満たす任意の \mathbb{K} -線型写像 $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$ に対して, ある $v \in V$ が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$$

が成り立つ.

証明 case1: ϕ が既約かつ忠実な場合

(2.3.2) を充たす任意の $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$ を 1 つとる. \mathfrak{g} の基底 $\{e_\mu\}$ を 1 つ固定し,

$$\beta: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}, (x, y) \longmapsto \text{Tr}(\phi(x) \circ \phi(y))$$

を用いて補題 2.3.4-(1) の方法で対応する \mathfrak{g} の基底 $\{e^\mu\}$ を作る. このとき

$$v := \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) \in V$$

とおくと, $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して補題 2.3.4 と同じ記号の下で

$$\begin{aligned} \phi(x)(v) &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(x) \circ \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} [\phi(x), \phi(e_\mu)] \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(\text{ad}(x)(e_\mu)) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} a_\mu^\nu \phi(e_\nu) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\mu) \\ c_\phi \circ f(x) &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(e^\nu) \circ f(x) \\ &= \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f([e^\nu, x]) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \\ &= - \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ f(\text{ad}(x)(e^\nu)) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \\ &= - \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} b_\mu^\nu \phi(e_\mu) \circ f(e^\mu) + \sum_{\mu=1}^{\dim \mathfrak{g}} \phi(e_\mu) \circ \phi(x) \circ f(e^\nu) \end{aligned}$$

と計算できるので, 補題 2.3.4-(2) から

$$\phi(x)(v) = c_\phi \circ f(x)$$

が言えた. 仮定より \mathfrak{g} -加群 V は既約なので, Schur の補題-(1), (2) から \mathfrak{g} -加群の準同型 $c_\phi: V \longrightarrow V$ は \mathfrak{g} -加群の同型であり, $c_\phi^{-1}(v) \in V$ が所望のベクトルとなる.

case2: ϕ が忠実とは限らない既約表現の場合

(2.3.2) を充たす任意の $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$ を 1 つとる. このとき $\forall [x, y] \in [\text{Ker } \phi, \text{Ker } \phi]$ に対して

$$f([x, y]) = \phi(x) \circ f(y) - \phi(y) \circ f(x) = 0 \iff [x, y] \in \text{Ker } f$$

が言えるが, 仮定より \mathfrak{g} は半単純なので, 系 2.2.3-(3) よりそのイデアルである $\text{Ker } \phi \subset \mathfrak{g}$ もまた半単純. 故に系 2.2.3-(1) から $[\text{Ker } \phi, \text{Ker } \phi] = \text{Ker } \phi$ であり,

$$\text{Ker } \phi \subset \text{Ker } f$$

がわかった。従ってこのとき商ベクトル空間の普遍性を使うことができ、以下の図式を可換にする $\bar{f} \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V/\text{Ker } \phi, \mathfrak{g})$ が一意に存在する：

$$\begin{array}{ccc} \mathfrak{g} & \xrightarrow{f} & V \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{f} & \\ \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi & & \end{array}$$

さらに商代数の普遍性から、表現 $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ は以下の図式を可換にする表現 $\bar{\phi}: \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ に一意に持ち上がる：

$$\begin{array}{ccc} \mathfrak{g} & \xrightarrow{\phi} & \mathfrak{gl}(V) \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{\phi} & \\ \mathfrak{g}/\text{Ker } \phi & & \end{array}$$

このとき $\bar{\phi}$ は $\mathfrak{g}/\text{Ker } \phi$ の忠実な既約表現であり、 $\bar{f} \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}/\text{Ker } \phi, V)$ は (2.3.2) を満たす。よって **case1** からある $v \in V$ があって

$$\forall x \in \mathfrak{g}, \bar{f}(x + \text{Ker } \phi) = \bar{\phi}(x + \text{Ker } \phi)(v) \iff \forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$$

が成り立つ。

case3: ϕ が一般の場合

(2.3.2) を満たす任意の $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V)$ を 1 つ固定する。このときある $v \in V$ が存在して $\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$ が成り立つことを $\dim V$ に関する数学的帰納法により示す。 $\dim V = 1$ のとき、補題 2.3.5 より ϕ が零写像なので $\forall v \in V$ に対して $\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \phi(x)(v)$ が成り立つ。

$\dim V > 0$ とする。 \mathfrak{g} -加群 V が既約でないならば、部分 \mathfrak{g} -加群 $0 \subsetneq W \subsetneq V$ が存在する。標準的射影^{*6} $p: V \rightarrow V/W$ および $\forall x \in \mathfrak{g}$ について $W \subset \text{Ker } p \circ \phi(x)$ であるから、商代数の普遍性より $\forall \phi(x) \in \phi(\mathfrak{g})$ に対して以下の図式を可換にする $\bar{\phi}(x) \in \mathfrak{gl}(V/W)$ が一意に存在する：

$$\begin{array}{ccc} V & \xrightarrow{p \circ \phi(x)} & V/W \\ p \downarrow & \nearrow \exists! \bar{\phi}(x) & \\ V/W & & \end{array}$$

このとき写像

$$\phi_1: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V/W), x \mapsto (v + W \mapsto \bar{\phi}(x)(v + W))$$

は well-defined な Lie 代数の準同型なので \mathfrak{g} の表現である。 $f_1 := p \circ f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, V/W)$ は ϕ_1 に関して (2.3.2) を満たすので、帰納法の仮定より^{*7} ある $v_1 + W \in V/W$ が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f_1(x) = f(x) + W = \phi_1(x)(v_1 + W)$$

^{*6} このとき V の \mathbb{K} -ベクトル空間としての構造しか見ない。

^{*7} $\dim V/W < \dim V$ なので帰納法の仮定が使える。

が成り立つ。ここで $f_2 \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, W)$ を

$$f_2(x) := f(x) - \phi(x)(v_1)$$

と定義すると, f_2 は部分表現 $\phi|_W: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(W)$ に関して (2.3.2) を満たす。よって帰納法の仮定から*8ある $v_2 \in V$ が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f_2(x) = \phi|_W(x)(v_2)$$

が成り立つ。以上より, $v := v_1 + v_2 \in V$ とおけば

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = f_2(x) + \phi(x)(v_1) = \phi|_W(x)(v_2) + \phi(x)(v_1) = \phi(x)(v)$$

が言えた。 ■

定理 2.3.3: 完全可約性に関する Weyl の定理

$\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ が半単純 Lie 代数の有限次元表現ならば, ϕ は完全可約である。

証明 V の任意の部分 \mathfrak{g} -加群 $W \subset V$ を 1 つ固定する。このとき命題 2.3.1 より, 部分 \mathfrak{g} -加群 $W^c \subset V$ が存在して $V \cong W \oplus W^c$ が成り立つことを示せば良い。

$\text{End } V$ の部分ベクトル空間 L_W を

$$L_W := \{ t \in \text{End } V \mid t(V) \subset W, t(W) = 0 \}$$

と定める。 L_W への \mathfrak{g} の左作用を

$$x \blacktriangleright t := [\phi(x), t]$$

と定義すると, W が部分 \mathfrak{g} -加群であることおよび定義 2.3.7 より L_W は \mathfrak{g} -加群になる。 i.e.

$$\tilde{\phi}: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(L_W), x \mapsto (t \mapsto x \blacktriangleright t)$$

は半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の有限次元表現である。

ここで \mathbb{K} -ベクトル空間 W への射影演算子*9 $p: V \rightarrow V$ を 1 つとり, $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(\mathfrak{g}, L_W)$ を

$$f(x) := [p, \phi(x)]$$

と定義しよう。このとき $\forall x, y \in \mathfrak{g}$ に対して Jacobi 恒等式から

$$\begin{aligned} f([x, y]) &= [p, [\phi(x), \phi(y)]] \\ &= [\phi(x), [p, \phi(y)]] - [\phi(y), [p, \phi(x)]] \\ &= [\phi(x), f(y)] - [\phi(y), f(x)] \\ &= \tilde{\phi}(x) \circ f(y) - \tilde{\phi}(y) \circ f(x) \end{aligned}$$

*8 $\dim W < \dim V$ なので帰納法の仮定が使える。

*9 $p^2 = p$ かつ $p|_W = \text{id}_W$

が成り立つので、補題 2.3.6 からある $t \in L_W$ が存在して

$$\forall x \in \mathfrak{g}, f(x) = \tilde{\phi}(x)(t) = [\phi(x), t]$$

が成り立つ。よってこのとき $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して

$$[\phi(x), p+t] = \tilde{\phi}(\phi(x))(p+t) = -[p, \phi(x)] + [\phi(x), t] = -f(x) + [\phi(x), t] = 0$$

が言えた。i.e. $p+t \in \text{End } V$ は \mathfrak{g} -加群の準同型である。さらに $t \in L_W$ であることから、 $(p+t)(V) = W$ かつ $(p+t) \circ (p+t)|_W = \text{id}_W$ が言える。i.e. \mathfrak{g} -加群の短完全列

$$0 \hookrightarrow \text{Ker}(p+t) \hookrightarrow V \xrightarrow{p+t} W \longrightarrow 0$$

は分裂し、 \mathfrak{g} -加群の直和として

$$V \cong W \oplus \text{Ker}(p+t)$$

が言えた。 ■

2.3.6 Jordan 分解の保存

この小節でも引き続き \mathbb{K} を標数 0 の体とする。

部分 Lie 代数 $\mathfrak{h} \subset \mathfrak{g}$ に関して

$$\text{ad}_{\mathfrak{h}}(x): \mathfrak{h} \longrightarrow \mathfrak{g}, v \longmapsto [x, v]$$

と定義する。

定理 2.3.4: Jordan-Chevalley 分解と抽象 Jordan 分解

V を有限次元 \mathbb{K} -ベクトル空間とし、 $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{gl}(V)$ を半単純線型 Lie 代数とする。

このとき $\forall x \in \mathfrak{g}$ の Jordan-Chevalley 分解 $x = x_s + x_n$ について $x_s, x_n \in \mathfrak{g}$ が成り立つ。特に、 x の抽象 Jordan 分解 $s_x, n_x \in \mathfrak{g}$ に関して $x_s = s_x, x_n = n_x$ が成り立つ。

証明 後半の主張は Jordan-Chevalley 分解および抽象 Jordan 分解の一意性より従うので、前半を示せば良い。

$\forall x \in \mathfrak{g}$ を 1 つ固定し、 x の Jordan-Chevalley 分解 $x = x_s + x_n$ をとる。 $\text{ad}_{\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})}(x)(\mathfrak{g}) \subset \mathfrak{g}$ なので命題 2.1.1-(3) より $\text{ad}_{\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})}(x_s)(\mathfrak{g}) \subset \mathfrak{g}$, $\text{ad}_{\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})}(x_n)(\mathfrak{g}) \subset \mathfrak{g}$ が言える。i.e. 正規化代数の言葉を使うと $x_s, x_n \in N_{\mathfrak{gl}(V)}(\mathfrak{g}) =: N$ が言える^{*10}。

包含準同型 $\mathfrak{g} \hookrightarrow \mathfrak{gl}(V)$ によって V を \mathfrak{g} -加群と見做し、 V の任意の部分 \mathfrak{g} -加群 W をとる。このとき部分 \mathfrak{g} -加群 $\mathfrak{g}' \subset \mathfrak{gl}(V)$ を

$$L_W := \{ y \in \mathfrak{gl}(V) \mid y(W) \subset W \text{ かつ } \text{Tr}(y|_W) = 0 \}$$

と定義する^{*11}。仮定より \mathfrak{g} は半単純 Lie 代数なので系 2.2.3-(1) より $\mathfrak{g} = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$ であり、 $\mathfrak{g} \subset L_W$ が言える。さらにこのとき命題 2.1.1-(3) より $x_s, x_n \in L_W$ も言える^{*12}。

^{*10} 補題 2.3.5 より $\mathfrak{g} \subset \mathfrak{sl}(V)$ なので $\mathfrak{g} \subseteq N$ であることに注意

^{*11} 例えば $L_V = \mathfrak{sl}(V)$ である

^{*12} $\text{Tr}(x_n) = 0$ なので、 $\text{Tr}(x) = \text{Tr}(x_s) = 0$ 。

ここで

$$\mathfrak{g}' := N \cap \left(\bigcap_{\substack{W \subset V, \\ \text{部分}\mathfrak{g}\text{-加群}}} L_W \right)$$

とおくと、 \mathfrak{g}' は \mathfrak{g} をイデアルとしてもつ N の部分 Lie 代数であり、 $\forall x \in \mathfrak{g}$ に対して $x_s, x_n \in \mathfrak{g}'$ だとわかる。

最後に $\mathfrak{g} = \mathfrak{g}'$ が成り立つことを示す。包含準同型 $\mathfrak{g} \hookrightarrow \mathfrak{g}'$ は半単純 Lie 代数 \mathfrak{g} の有限次元表現なので、Weyl の定理よりある \mathfrak{g}' の部分 \mathfrak{g} -加群 \mathfrak{h} が存在して $\mathfrak{g}' = \mathfrak{g} \oplus \mathfrak{h}$ と書ける (命題 2.3.1)。ここで W を V の任意の既約な部分 \mathfrak{g} -加群とする。もし $y \in \mathfrak{h}$ ならば、 $[\mathfrak{g}, \mathfrak{g}'] \subset \mathfrak{g}^{*13}$ であることから $[\mathfrak{g}, y] = 0$, i.e. $y: V \rightarrow V$ は \mathfrak{g} -加群の準同型である。よって代数閉体上の Schur の補題から $y|_W: W \rightarrow W$ はスカラー倍である。一方で $y \in L_W$ でもあるので $\text{Tr}(y|_W) = 0$ であり、 $y|_W = 0$ だと分かった。Weyl の定理より V は既約な部分 \mathfrak{g} -加群の直和なので $y = 0$ が言えた。i.e. $\mathfrak{h} = 0$ である。

■

系 2.3.5:

\mathfrak{g} を半単純 Lie 代数、 $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ をその有限次元表現とする。

このとき $\forall x \in \mathfrak{g}$ の抽象 Jordan 分解 $x = s_x + n_x$ に対して、 $\phi(x) = \phi(s_x) + \phi(n_x) \in \mathfrak{gl}(V)$ は Jordan-Chevalley 分解である。i.e. $\phi(x)_s = \phi(s_x)$, $\phi(x)/n = \phi(n_x)$ が成り立つ。

証明 s_x は半単純なので $\text{ad}(s_x): \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{g}$ も半単純。i.e. $\text{ad}(s_x)$ は対角化可能なので $\text{ad}(s_x)$ の固有ベクトル全体がなす集合は \mathfrak{g} の基底となる。従って $\text{ad}_{\phi(\mathfrak{g})}(\phi(s_x)): \phi(\mathfrak{g}) \rightarrow \phi(\mathfrak{g})$ の $\phi(\mathfrak{g})$ の固有ベクトル全体がなす集合は $\phi(\mathfrak{g})$ の基底となる。i.e. $\text{ad}_{\phi(\mathfrak{g})}(\phi(s_x))$ は半単純である。同様に $\text{ad}_{\phi(\mathfrak{g})}(\phi(n_x))$ が冪零であることもわかるので、 $\phi(x) = \phi(s_x) + \phi(n_x)$ は半単純 Lie 代数 $\phi(\mathfrak{g})$ における $\phi(x)$ の抽象 Jordan 分解である。よって定理 2.3.4 からこれは Jordan-Chevalley 分解と一致する。

■

2.4 $\mathfrak{sl}(2, \mathbb{K})$ の表現

この節において常に $\mathfrak{g} = \mathfrak{sl}(2, \mathbb{K})$ とし、 \mathfrak{g} の全ての表現は有限次元であるとする。【例??】に倣って \mathfrak{g} の基底は

$$\begin{aligned} x &:= \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{bmatrix}, \\ y &:= \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 0 \end{bmatrix}, \\ h &:= \begin{bmatrix} 1 & \\ 0 & -1 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

*13 $\mathfrak{g}' \subset N$ だから

を採用する．このとき

$$\begin{aligned}[h, x] &= 2x, \\ [h, y] &= -2y, \\ [x, y] &= h\end{aligned}$$

が成り立つ．

2.4.1 ウェイトと極大ベクトル

任意の \mathfrak{g} の表現 $\phi: \mathfrak{g} \rightarrow \mathfrak{gl}(V)$ を与える． h は半単純なので系 2.3.5 より $\phi(h)$ を対角化する V の基底がある．よって

$$V_\lambda := \{ v \in V \mid \phi(h)(v) = \lambda v \}$$

とおくと V は異なる λ に関する V_λ の内部直和になる（固有空間分解）^{*14}：

$$V = \bigoplus_{\lambda \in \mathbb{K}} V_\lambda$$

特に $V_\lambda \neq 0$ のとき λ を h のウェイト (weight) と呼び、 V_λ をウェイト空間 (weight space) と呼ぶ．

補題 2.4.1:

$$v \in V_\lambda \implies x \triangleright v \in V_{\lambda+2}, y \triangleright v \in V_{\lambda-2}$$

証明

$$h \triangleright (x \triangleright v) = [h, x] \triangleright v + x \triangleright h \triangleright v = (\lambda + 2)x \triangleright v$$

■

$\dim V < \infty$ なので、 $V_\lambda \neq 0$ かつ $V_{\lambda+2} = 0$ を満たす $\lambda \in \mathbb{K}$ が存在する．このとき $v \in V_\lambda \setminus \{0\}$ のことをウェイト λ の極大ベクトルと呼ぶ．

2.4.2 既約加群の分類

\mathfrak{g} -加群 V は既約であるとする．極大ベクトル $v_0 \in V_\lambda$ をとり、

$$v_i := \begin{cases} 0, & i = -1 \\ \frac{1}{i!} y^i \triangleright v_0, & i \geq 0 \end{cases}$$

とおく．

^{*14} λ が h の固有値でなければ $V_\lambda = 0$ となる．

補題 2.4.2:

- (1) $h \triangleright v_i = (\lambda - 2i)v_i$
- (2) $y \triangleright v_i = (i + 1)v_{i+1}$
- (3) $x \triangleright v_i = (\lambda - i + 1)v_{i-1} \quad w/ \quad i \geq 0$

証明 (1) 補題 2.4.1 より明らか.

(2) v_i の定義より

$$y \triangleright v_i = \frac{1}{i!} y^{i+1} \triangleright v_0 = (i + 1)v_{i+1}$$

(3) i に関する数学的帰納法により示す. $i = 0$ のときは自明. $i > 0$ とする. 帰納法の仮定より $x \triangleright v_{i-1} = (\lambda - i + 2)v_{i-2}$ であるから,

$$\begin{aligned} x \triangleright v_i &= \frac{1}{i} x \triangleright y \triangleright v_{i-1} \\ &= \frac{1}{i} [x, y] \triangleright v_{i-1} + \frac{1}{i} y \triangleright (x \triangleright v_{i-1}) \\ &= \frac{\lambda - 2i + 2}{i} v_{i-1} + \frac{(\lambda - i + 2)(i - 1)}{i} v_{i-1} \\ &= (\lambda - i + 1)v_{i-1} \end{aligned}$$

が言えて帰納法が完成する. ■

補題 2.4.2-(1) より 0 でない $v_i \in V$ たちは全て線型独立であるが, $\dim V < \infty$ である. そこで

$$m := \min \{ m \in \mathbb{Z} \mid v_m \neq 0 \text{ かつ } v_{m+1} = 0 \}$$

とおく. $\forall i > 0$ に対して $v_{m+i} = 0$ が言えて, $\text{Span}\{v_0, \dots, v_m\} \subset V$ は非零な部分 \mathfrak{g} -加群である. \mathfrak{g} は既約だったので $V = \text{Span}\{v_0, \dots, v_m\}$ が言えた.

(3) を $i = m + 1$ の場合に適用すると $0 = (\lambda - m)v_m$ となり, $\lambda = m = \dim V - 1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ がわかる. この m を \mathfrak{g} -加群 V の**最高ウェイト** (highest weight) と呼ぶ.

定理 2.4.1:

V を $\mathfrak{g} = \mathfrak{sl}(2, \mathbb{K})$ の**既約表現**とする.

(1) $m := \dim V - 1$ とおくと \mathbb{K} -ベクトル空間として

$$V = \bigoplus_{\mu=-m}^m V_{\mu}, \quad \dim V_{\mu} = 1$$

が成り立つ.

(2) V の極大ベクトルは一意であり, そのウェイトは m である.

(3) \mathfrak{g} の V への作用は補題 2.4.2 によって完全に決まる.

系 2.4.2:

V を任意の有限次元 $\mathfrak{g} = \mathfrak{sl}(2, \mathbb{K})$ -加群とする. このとき $\phi(h): V \rightarrow V$ の固有値は全て整数で, かつ自身にマイナス符号をつけたものと同じ回数だけ出現する. さらに, V の任意の既約表現への内部直和分解において, 直和因子の個数はちょうど $\dim V_0 + \dim V_1$ 個である.

証明 $V = 0$ なら明らか. $V \neq 0$ とする. **Weyl の定理**により V を既約な部分 \mathfrak{g} -加群の直和に分解すると, 既約な部分 \mathfrak{g} -加群は全て定理 2.4.1-(1) の形をしているので前半が従う.

後半を示す. V の既約な部分 \mathfrak{g} -加群への直和分解を

$$V = \bigoplus_i W_i$$

と書くと, 定理 2.4.1 より $\forall i$ に対して何かしらの $m_i \geq 0$ が存在して $W_i \cong \bigoplus_{\mu=-m_i}^{m_i} V_\mu$ と書ける. 逆に, $\bigoplus_{\mu=-m_i}^{m_i} V_\mu$ と \mathfrak{g} -加群として同型な全ての W_i の直和を $V^{(m)}$ と書くと,

$$V = \bigoplus_{m=0}^{\infty} V^{(m)}$$

となる. よって $V^{(m)}$ の直和因子の個数を k_m とかくと

$$\dim V_\lambda = \sum_{\substack{m \geq |\lambda|, \\ m \equiv \lambda \pmod{2}}} k_m$$

となる. 特に

$$\dim V_0 + \dim V_1 = \sum_{m=0}^{\infty} k_m$$

なので示された. ■

2.5 ルート空間分解

2.5.1 極大トーラスとルート

2.5.2 極大トーラスの中心化代数

2.5.3 直交性

2.5.4 整性

2.5.5 有理性